

コメントライナー

第6690号

2019年4月15日(月)

◎聴衆を惹きつけて離さないために

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

◆受講者の反応がよくないのはなぜか

話がわかりやすい人とそうでない人の違いは何か。最近、筆者にある仕業の方から相談が寄せられた。「以前に顧問先から頼まれ、講師として研修に登壇した際、受講者から良い反応が得られなかったこと。それがトラウマになって、以来、研修や講演の依頼を断り続けてきた。が、何とか克服したいので、講師をする際の話し方のコツを教えてください」。

これは実はよくある相談だ。専門的な業務知識や経験が豊富にあり、かつ非常に論理的な人であったとしても、研修や講演などで講師の立場で話す際に、日常的な仕事での説明や伝達、社内や同業者との勉強会で話す際と同様に話していたのでは、聞き手の反応は十分に得られないだろう。

聞き手を惹きつけるためには①声や話し方②話の内容③表情や姿勢の3要素を意識する必要があるが、今回は、聞き手を惹きつけながら話を進めていくために必要な言葉の使い方について、お伝えしたいと思う。

◆冒頭でスタートとゴールを明示する

「話の地図を聞き手と共有し、道案内をするように聞き手を誘導しながら、ともにゴールを目指していきましょう」。これは、人前で話す際に心掛けたい話し手の基本姿勢として筆者が必ず伝えていることだ。

「話の地図を描く」というのは「話の冒頭に、スタートとゴール、話の道筋を聞き手に示しておくこと」で、きょうの研修の目的や目標、項目を話すことで、どういうスタンスで参加するものなのか、その場に参加する者の共通のベースを整えておくことである。

そして、1点目は、2点目は・・・と項目を立ててゴールに向かって話をしていくのだが、ここからの話の進め方が問題。項目が次に移る際の「つなぎの言葉」を意識しているだろうか。「で、次」「あと、二つ目は」「それから、」というような適当な接続詞では、「話の道案内」が十分にできていない。聞き手をうまく誘導していけるかどうかは、この各項目から次の項目へ進む際のブリッジとなるフレーズに掛かっているのだ。

◆「つなぎ」コメントで聞き手を連れていく

たとえば、「きょうは〈アジアの中の日本〉をテーマにお話を進めています。ただいまの一つ目めの項目では、〈日本をめぐるアジア〉という切り口で、最近のアジア情勢から気になる点や今後予測される動きなどをお伝えしてまいりました。キーワードとして『交流』が出てきたわけですが、次の項目〈アジアにおける日本の役割〉では、このキーワードをさらに掘り下げてみたいと思います」というように、ニュースキャスター風に前の項目のエッセンスを軽くまとめた上で、次の項目の前説をプラスすることで、話がどういう方向に向かおうとしているのか、聞き手にどういう視点で聞いてほしいのかを伝える。

つなぎのコメントは次の項目への架け橋となると同時に、話し手と聞き手をつなぐ橋となり、聞き手の共感と納得を得られる。内容だけでなく、どうつないでいくか、ここにも力を注いで、聞き手とともにゴールのテープを切る達成感を味わってほしい。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003